

名もなき南部女に捧げる刺しの花

「世界のムナカタ」として国際的な評価を得た版画家・棟方志功(1903-1975)は、生まれ故郷・青森について次のような言葉を残しています。

「わたくしは東北の生まれですが、東北も一番はじの冬が長く夏が短い、苦難の多い土地に育ちました。そこでは、百姓は苦勞して仕事をして、わずかな収穫しか得られず、夏あたりから寒い風が吹いて、いつも凶作ばかり、豊作という言葉は聞いたことのない土地に生まれました。易の方でも東北をさして鬼門と言います。その土地に生をうけた、ということはなんという宿命であったか。こういう宿命は自分一人のものではなく、土地の受けた宿命です。」(「板画の道」1956年)

東北地方の中でも青森県は寒冷な土地柄に起因する不毛な土地であり、そこでの暮らしは常に貧寒との共存でした。厳しい環境を懸命に生きた人、飢えや寒さで失われる命の話は遠い昔話ではなく、1930年の昭和農業恐慌や1934年の記録的大凶作と、度重なる苦難に見舞われる故郷に、棟方は連綿と続いてきた鬼門の気配を感じていたことでしょう。そのような中でも、人々は懸命に生き抜く知恵と工夫を凝らしました。南部菱刺しもそうして生まれ、遺されました。

東京都出身の天羽やよいが南部菱刺しと出会ったのは、八戸市に移住した翌年の1976年。公民館で行われた胸部X線検診のレントゲン車の中でした。「苦手な針仕事」に興味も沸かず、その時のことも忘れかけていた翌年、偶然立ち寄った書店で引き寄せられるように田中忠三郎著「南部つづれ菱刺し模様集」(1977年)を手に取ります。はじめは模様を眺めるだけでしたが、そのうち本を師として独学で刺し始めたのです。天羽の作品は、独創的な模様の組み合わせと草木染めの色彩が高い評価を得て、展示会に教室にと活動を広げてきました。

そんな中、天羽の針が止まる出来事が起きます。1995年の阪神・淡路大震災です。自分の仕事を活かして復興支援にあたるボランティアの姿を見て、

「菱刺し」という仕事が何の役に立てるのか自問自答する中、針を進めることができなくなったのです。菱刺しは、生きるために必要不可欠な衣服の補強と保温のために、農村部の女性たちが生み出した命に連なる手しごとだったはず。なのに、今の自分は目新しさを追った実用性に欠くものを作っている…。これまでの自分の刺しに意義を見出せなくなった天羽は、仕方無しに菱刺しの歴史に立ち返り、南部の女性たち、南部女と同じ刺し・同じ時間を感じることをできる「総刺し(布一面隙間なく刺し埋める刺し)」だけをやっていこうという答えに辿り着きました。そして、もともとの菱刺しの在り処だった「衣類」、この先も在り続けるだろう和服の「帯」に、自分の刺しの居場所を定めました。

しかし、東日本大震災を経て、何色もの糸を使う刺しへの違和感が生まれます。仕方なく一色の糸だけで刺すようになったある日、「あたしたち、そんな(多彩な)刺しはやったことないよ」と、南部女の声聞いたといえます。はっと思い返し、「阪神・淡路大震災の後、昔の南部女は、華やかな色彩の菱刺しを見ただろうか。いや、300年前の菱刺しは、糸や布の豊かさや色彩もない、ただ暮らしの知恵として育んできたものだったはず」。改めて歴史と自分の中の「南部女」に向き合った天羽の刺しは、南部菱刺しの特色ともいえる色彩をそぎ落とした一色の総刺しへと昇華します。

—— 無心に針を進めることで、針と自分がひとつになる。そして刺した時間分の模様が浮かび上がる。そこに自分と刺しの存在の『確かさ』を感じる。

そう語る天羽がたどり着いた制作の境地は禅的な思想にも似ています。

刺すことはこの地で生きることと不可分であるという天羽が創り出す南部菱刺しは、名もなき南部女たちへの供養であり、刺しはこの地に受け継がれた祈りのふるまいなのです。

八戸ポータルミュージアム 学芸員 伊多波麻衣子

天羽やよい (あもう・やよい)

1948年東京生まれ
1975年より青森県八戸市在住



●南部わらべ(2019年)

南部菱刺し制作者・青森県伝統工芸士。南部菱刺しを生活の中心において八戸での日々を過ごす天羽は独学で南部菱刺しを習得してきた。青森県民藝運動の中心人物であった青森県民藝協会会長の相馬貞三氏(1908-1989)との邂逅や民俗学者・田中忠三郎氏(1933-2013)との交流を経て、南部菱刺しの生まれた歴史的背景と「名もなき南部女」

を想い刺し続けている。自ら麻で織り八戸の植物で染めた布に同じく自ら染めた草木染めの糸で刺す天羽の菱刺しは、絵画的な美しさが評価され、メディアにも多数紹介されている。2024年7月に、南部菱刺しとの出会いからこれまでの制作を綴り、作品写真とともにまとめた書籍「南部菱刺し 刺しが教えてくれること」(東京図書出版)を出版した。

～生活の中から生まれた南部菱刺し～

南部菱刺しは、青森県西部の津軽こぎん刺しと山形県の庄内刺し子と並び、日本三大刺し子の一つに数えられる伝統的な手しごとです。江戸時代後期に青森県東部を含む南部地方農村部で発祥したといわれ、現在は青森県伝統工芸に指定されています。寒冷地ゆえに綿花が育たない青森県では、保温性に優れた木綿の普及が遅く、布といえば主に自給自足可能な麻でした。1891年の東北本線上野青森間の全線開通により綿布が流通し始めたものの、貧しい農村部では大正時代まで女性たちが自家製の麻を紡ぎ、機で織り、家族全員分の衣服から下着、おしめに至るまで手作りしていたそうです。しかし、日々の農作業や子育ての合間をぬって賄えるのは必要最小限の量だけ。子どものおくるみが用意できず間引きが行われた話が伝わるほどに、布支度は切実で生命に関わる仕事でした。そのため、一度作った衣服を補強し、寒さ厳しい青森の冬に備えて布の保温性を高めるためにも刺し子は必要不可欠でした。南部菱刺しの残された古作(実際に明治～昭和初期に使われていた刺しもの)は、着物の身ごろから袖先まで隙間なく刺しが施され、衣服づくりがどれほど大変な仕事だったかが偲べれます。

こうした名もなき女性たちの手しごとが、200年かけて数々の菱模様に結実し、「南部菱刺し」となりました。農民の作業着には不釣り合いなほど意匠に富んだ精緻な刺しは、貧寒のなかで懸命に生きた女性たちのささやかな自己表現であり、家族を寒さから守りたいという祈りでもあったことでしょう。



〔展示資料〕
左…のつづれ(上着)
右…たっつけ



天羽やよい展 ― 名もなき南部女に捧げる刺しの花 ―

本展覧会開催にあたり、ご協力いただいたみなさまに、八戸ポータルミュージアムと天羽やよいから、心よりの謝意を表します。

【敬称略・50音順】小田嶋暁子(ROUTE)／川守田礼子／木下牧子 庄司 忍／下館さた／中澤佳子／山本節子／福井裕美子／藤田真佐子 星野美代子／塚田恭子／山口達彦(TRNK)／山本貴士(kodica studio)

会期：2024年9月14日(土)～9月29日(日)
会場：八戸ポータルミュージアム シアター2
主催：八戸ポータルミュージアム

展示会場制作：TRNK／ビジュアルデザイン：ROUTE
作品撮影：kodica studio
企画・編集：八戸ポータルミュージアム 伊多波麻衣子
発行：八戸ポータルミュージアム(〒031-0032 青森県八戸市三日町11-1)
●表紙…無題(2001年) ●扉帯作品…宵夜(六通帯／2020年)

Embroidery of a Prayer Dedicated
to a Nameless Nanbu Woman

AMOU YAYOI EXHIBITION

天羽やよい展 名もなき南部女に捧げる刺しの花



●右側帯4作品〔右上より時計回り〕…和声(六通帯／2019年)、睡唄(六通帯／2023年)
風鈴(全通帯／2023年)、ジグソーパズルⅡ(六通帯／2024年)



「冬の間に織り上げた麻布を持って町場へ出かけ、
その六から七割で、裏打ちのための古手木綿や、
刺すための木綿糸に替えた。
織った布全部を、家族の衣類にできたわけじゃないんだなあ」

と、田中忠三郎さんにお聞きしたことがあります。とにかく、北前船によつて、京、大阪から運ばれてくる古手木綿はとても高価で、武家や商家の人たちがこの古手を着ていたそうです。麻を着た女たちは、織った麻布を古手木綿や糸に替えた後、町場を往く木綿の着物を着ている人たちを、どんな思いでどんな目で見っていたのでしょうか。羨ましかったのか、妬ましかったのか、農家に生まれた我が身を嘆いたのか、憤ったのか。自分が狭量のせいなのでしょう。刺しているとき、南部女たちのそのときの気持ちを、何度想像したか分かりません。何も感じなかったとはどうしても思えず、そんなことがとても気になってしまいます。そして、もうひとつ、家の中の女たちの位置はどうだったのだろうか。相馬貞三さんにお会いした時の難しいお話は理解できませんでしたが、そこに入る前のほんの数分、こんな話をしてくださいました。

—— 母ちゃんが機に上がると、父ちゃんも子供たちも洗濯や炊事を引き受けて、母ちゃんを助けたものなんです。昔は男尊女卑なんてなかったんですよ、そんなこととしてたら生きていかれませんから。機は女たちの聖域だったんでしょう——。

外で感じたであろう心状と、家での確かな場所。便利に暮らしながら

「自己実現」と言う言葉を耳にするいま、あしたへ命を繋ぐことで精一杯だった、昔々の南部女たちへ問うべきことは何もなく、ただ問われ続けます。

*

数年前、テレビの将棋番組でもとても興味深い言葉を聞きました。八十一升の盤上で、四十の駒による手は、十の六十乗以上あるとのこと。数の単位では、不可思議の領域で、盤上は宇宙なのだそうです。棋士たちは、きつと勝敗だけではなく、その先にある宇宙を見たくて、精励しているのかもしれないね。

笑われてしまいそうですが、私はこのとき菱刺しのことを考えました。模様は三百数十個あり、地刺しも四十位あります。色だつて使えます。十の六十乗とか宇宙とまでは言えなくても、もつといろいろなことができますんじゃないか。奇を衒わず、でも新しい顔をした、あちらに居る南部女たちにも喜んでもらえるような、そんな刺しに出合ってみたい。

世の中とは、かなり隔った場所になってしまった感じもありますが、いつもの定位置、この現場とにかく座って針を持ち続けたいと思っています。

天羽やよい 二〇二四年九月

※1 田中忠三郎(1933~2013) 下北郡川内町(現むつ市)生まれ。独学で道跡発掘や民具の収集・研究に取り組んだ民俗研究家。小川原湖民俗博物館館長、(財)稽古館館長を歴任。天羽が独学の師とした「南部つれ菱刺し模様集」(1977)著。

※2 相馬貞三(1908~1989) 南津軽郡竹館村(現平川市)生まれ。柳宗悦の『工芸の道』の影響を受け、日用品のなかに美を見いだす民藝運動を展開。青森県民藝協会の創立者であり、民芸品の研究のはか民芸品の商品開発や作り手の育成などに尽力した。